

# 「思春期青年期世代がん患者をケアする看護師教育プログラムに必要な要素の検討（要旨）」

(Essential Elements for an Oncology Nursing Education Program in the Field of Adolescent Cancer)

看護学研究科：家族・生涯発達看護学 I

学籍番号：DN-17401

氏名：小林幹紘

指導教員：小島ひで子 教授

## I. 背景

AYA 世代がんとは、15 歳から 40 歳未満で発症する悪性腫瘍の総称である。希少がんの割合が高いこの世代のがんは、治療成績が悪く、その改善は世界的な課題となっている。特に、15 歳から 29 歳までに多い急性リンパ性白血病の 10 年相対生存率は 36.9%と低い。また、AYA 世代がん患者の中には幅広い年齢層の患者が含まれる。がん治療には、この集団特有の心理社会的要因から生じる難しさがあり、ライフステージに応じたがん対策が求められている。その中でも、小児医療と成人医療の狭間があり、がんの種類によって異なる診療科で治療が進められる思春期青年期世代は、アイデンティティを形成し、両親から自律しながら就学や就職、結婚や妊娠出産などの様々なライフイベントを迎える時期である。がん治療や晩期合併症は、身体的、精神的、社会的に非常に大きな影響を与えることが明らかにされており、医療従事者は、治療経過で生じる様々な問題に患者が対処できるようなケアの提供が求められる。しかし、思春期青年期世代がん患者に対する看護の実態と課題についての研究は希少であり、その実態は明らかではない。また、看護師への教育的介入の必要性は明らかにされているが、その具体的な方法について言及した研究はない。そこで、研究者は思春期青年期世代に焦点を当て、この世代のがん患者の看護に必要な実践内容や学習ニーズの調査から、教育プログラムに必要な要素を抽出する必要があると考えた。

## II. 研究目的

本研究は、思春期青年期世代がん患者をケアする看護師を対象とした教育プログラムに必要な要素を検討することを目的とした。研究 1 では、思春期青年期世代がん患者に対する看護実践の内容や実践に臨む看護師の姿勢の実態と看護師の捉えた課題を明らかにする。研究 2 では、研究 1 の結果に基づき、思春期青年期世代がん患者に対するケアの観点からみる看護師の困難感と学習ニーズを明らかにし、これらの 2 つの研究から、教育プログラムの要素を検討した。

## III. 研究方法

### 1. 研究 1

研究デザインは、質的記述的研究デザインにおける探索的研究とし、調査期間は2018年4月27日～2018年10月31日である。研究対象者は、日本がん看護学会の小児・AYA世代がん看護SIG(Special Interest Group)に所属する看護師のうち、わが国では数少ないAYA世代病棟に勤務し、思春期青年期世代の看護の専門性が高い看護師で5年以上の看護経験があり、管理職でない方とした。データ収集はインタビューガイドを用いた半構造化面接で行った。分析は、Krippendorff(1980/1989)の内容分析法を用い、研究の目的と関連する内容の記述部分に着目して個別データをコード化、カテゴリー化し、個別データ分析終了後、全体分析では、意味内容が同じカテゴリーを集め大カテゴリーを生成した。倫理的配慮として、北里大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：2018-2-3）

## 2. 研究2

研究デザインは、質的記述的研究デザインにおける探索的研究とし、調査期間は2018年11月28日～2019年6月30日である。研究対象者は、地域がん診療連携拠点病院の看護師とし、話題の共通性と話しやすさを考慮し、思春期青年期世代がん患者に対する看護経験年数に応じ2群に分けた。グループ1の新人から中堅の看護師は、思春期青年期世代がん患者の看護経験があり、かつ思春期青年期世代がん患者が入院する病棟での勤務年数5年未満とした。グループ2の思春期青年期世代がん患者の看護経験が豊富な看護師は、思春期青年期世代がん患者が入院する病棟または外来勤務年数が5年以上で、現在管理職でない方とした。データ収集は、フォーカスグループインタビューで行い、分析はVaughn(1996/1999)らのグループインタビューの方法を用い、研究の目的と関連する部分の情報を単位化し、類似する情報単位からサブカテゴリーとカテゴリーを生成した。グループ1とグループ2の分析終了後、ケアの観点からみる困難感と学習ニーズに関する各グループの特徴と類似性を検討した。倫理的配慮として、北里大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：2018-14-4）

## IV. 結果

### 1. 研究1

研究対象者は8名、臨床経験の平均年数は18.6年、思春期青年期世代がん患者の看護経験の平均年数は10.5年であった。分析の結果、81のコード、29のサブカテゴリー、12のカテゴリー、4の大カテゴリーに収束した。思春期青年期世代がん患者に対する看護実践の内容や実践に臨む看護師の姿勢の実態と看護師の捉えた課題として、根幹には【思春期青年期のがんと発達過程の理解】があり、これらを基盤に【主体性を尊重しながらニーズを探る姿勢】で看護をしていた。一方で、患者の本心に触れる距離感を模索し、患者を看取る家族や将来を失望する患者に関わる苦悩を抱きながら、患者の意思を尊重できない状況でケアする葛藤や妊孕性温存のアプローチへのためらいから【患者の核心に迫り切れないことへの苦慮】があった。これに対して、自律を促す年齢相応の環境整備や治療終了後に【がんと共に生きる患者の

自律を支えるケア】をしていた。

## 2. 研究2

グループ1の新人から中堅の看護師の研究対象者は7名、臨床経験年数および思春期青年期世代がん患者の看護経験年数は平均2年であった。また、グループ2の思春期青年期世代がん患者の看護経験が豊富な看護師の研究対象者は8名、臨床経験の平均年数は15.6年、思春期青年期世代がん患者の看護経験の平均年数は11.4年であった。分析の結果、グループ1は30のコード、15のサブカテゴリー、5のカテゴリーに収束し、グループ2は34のコード、19のサブカテゴリー、6のカテゴリーに収束した。思春期青年期世代がん患者にケアを行う新人から中堅の看護師は、【捉えどころのない患者との距離感への戸惑い】、【将来ある患者への見当もつかないケア】、【心情を計り知れない患者家族との関わり】について困難感を抱いていた。これに対して、思春期青年期世代がん患者の特徴と関わり方や妊孕性温存の知識といった【思春期青年期世代がん患者のケアに必要な知識】と【経験不足を補う他者の実践や体験からの学び】についての学習ニーズがあった。また、思春期青年期世代がん患者の看護経験が豊富な看護師は、【自律過程にある患者との関わりへの憂慮】、【希望を見いだせない患者に寄り添う難しさ】、【長期的なサバイバー支援の難しさ】、【患者を取り巻く家族との関わりへの戸惑い】について困難感を抱いていた。これに対して、【思春期青年期世代がん患者のケアに必要な知識】には晩期合併症の影響も含まれており、患者会を紹介するためのピアサポートといった【患者が利用できる社会的サポート資源の知識】の学習ニーズがあった。

## V. 考察

研究1より導き出された看護実践の内容や実践に臨む看護師の姿勢の実態と看護師が捉えた課題は、思春期青年期世代の看護の専門性が高い看護師だからこそ実践できたケアであり、高い倫理観を持つ看護師だからこそ捉えられる自律過程にある患者のケアの課題であると考えられた。このようなケアの観点に着目し、教育プログラムには「思春期青年期のがんと発達過程の理解」、「主体性を尊重しながらニーズを探る姿勢」、「がんと共に生きる患者の自律を支えるケア」の3つの観点が必要と考えた。さらに、これらの観点と研究2で明らかにした学習ニーズとの関連性から、教育プログラムに必要な要素を検討した。

思春期青年期世代の看護の専門性が高い看護師は、患者一人一人の発達過程に応じたケアの観点を持ち、主体性を尊重しながらニーズを探る姿勢で看護しており、これらはこの世代のがん患者の看護において重要なケアの観点であると考えられた。これに対して、新人から中堅の看護師と思春期青年期世代がん患者の看護経験が豊富な看護師は、この世代がん患者の特徴と関わり方、妊孕性温存の知識について共通した学習ニーズを持っていた。以上より、教育プログラムには、看護経験に関わらず、思春期青年期世代のがんやこの世代の特徴と発達過程、妊孕性の問題に関するアプローチに加えて、患者との関わり方、患者を尊重した意思決定支援やがんと診断された患者家

族の心情の理解が必要な要素になると考えた。また、思春期青年期世代の看護の専門性が高い看護師は、ピアサポートの重要性を理解して環境整備を試みていた。このような、がんと共に生きる患者の自律を支えるケアは、この世代のがん患者の看護に重要なケアの観点である。そのため、看護経験に関わらず、晩期合併症と生きる患者への支援や思春期青年期世代がん患者のピアサポートは、教育プログラムに必要な要素と考えられた。一方で、新人から中堅の看護師と思春期青年期世代がん患者の看護経験が豊富な看護師は、「経験不足を補う他者の実践や体験からの学び」や「患者が利用できる社会的サポート資源の知識」といった異なる学習ニーズを持っていた。そのため、思春期青年期世代がん患者の看護経験に応じて、教育プログラムの内容を調整する必要があると考えられた。

## VI. 結論

思春期青年期世代がん患者をケアする看護師を対象とした教育プログラムには、「思春期青年期のがんと発達過程の理解」、「主体性を尊重しながらニーズを探る姿勢」、「がんと共に生きる患者の自律を支えるケア」の3つの観点が見出された。さらに、これらの観点と学習ニーズの関連性から、教育プログラムには、思春期青年期世代がんの特徴や発達過程、患者との関わり方や患者を尊重した意思決定支援、晩期合併症と生きる患者への支援や思春期青年期世代がん患者のピアサポートといった要素が必要であると示された。